令和３年度　実践のまとめ

１年　社会　アジアに届け！二川が誇る黒い雷神（ブラックサンダー）（世界の諸地域「アジア州」）

１ 単元構想文

単元目標

・アジア州の諸地域の地理的特徴や経済の特色，それに伴う課題について理解することができる
（知識・技能）

・アジア州の諸地域で起きている課題の要因や影響について，資料やゲストティーチャーの話をもとに地域間の結びつきなどに着目して判断したり表現したりすることができる
（思考・判断・表現）

・アジア州の諸地域の特色や課題について粘り強く考え，日本との関係や自分の生活と関連づけて追究しようとする　（主体的に学習に取り組む態度）

単元について（下線：主なてだて）

本学級の生徒は，社会科の学習に対して意欲的に取り組むことができる。歴史の単元では，古代の日本の生活や政治について，東アジアの国々との関係や国内の豪族・貴族の繁栄に着目し，当時の文献や資料を根拠にして考えることができた。歴史は，小学校でも学習しており，内容に物語性があるため，興味をもって学ぶ生徒が多い。一方で，地理は，世界の地域が生徒にとって遠い存在であり，自分の生活とつなげて考えにくいため，すすんで学ぼうとする姿が見られないのが現状である。近年の国際化から，将来日本国内だけでなく世界を視野に活躍したり，生活の拠点を移したりする生徒や，海外の人々とかかわりをもつ生徒が増えていくと考えられる。そこで，本単元では，世界の諸地域について多面的・多角的に捉え，それぞれの地域と自分たちの生活とのつながりに気づき，世界と日本との関係について自分の考えを深められるようにしていきたい。

本単元では，二川校区内に製造工場があり，生徒たちになじみの深いお菓子“ブラックサンダー”で有名な「有楽製菓」を教材として取り上げる。有楽製菓は，近年，シンガポールと合弁会社を設立し，インドネシアに工場を造って，インドネシアやマレーシアなどでブラックサンダーを販売するようになった。その背景には，インドネシアの人口数，雇用，産業などの面で，日本だけでなくインドネシアにとってのメリットもある。東南アジアは近年工業化が進んでおり，工場や支店などの拠点を置く日本企業が増えている。有楽製菓を取り上げることで，インドネシアや東南アジアの特徴を学ぶことができ，良好な関係を築くための相互の工夫や努力に気づくことができる。有楽製菓を教材にすることは，身近な企業とアジアとのつながりをきっかけに，自分の生活や未来にもアジアが大きくかかわっていることに目を向けて考えを深めていくのに適していると考えた。

見いだす段階では，東南アジアの国々で販売されているブラックサンダーのパッケージを観察し，パッケージを見てわかることについて探す場を設定する。生徒はパッケージに書いてある言語やマークを見て，見慣れている日本のものとの違いに気づき，どこで売られているものだろうと興味をもつ。ブラックサンダーについて調べていく中で，有楽製菓がシンガポールに会社を設立し，インドネシアの工場で作られていることを知る。生徒にとってインドネシアはなじみがなく，どんな国かイメージがもてない。そこで，有楽製菓がインドネシアに進出した理由について，インドネシアの地域的特色をもとにして追究していく。教師は，生徒が根拠をもって理由を考えられるように，インドネシアについて図書資料やタブレットを使って個人追究をする場を設定する。人口，経済，産業，自然環境などの面からインドネシアについて調べを進めた生徒は，その特色から有楽製菓がインドネシアを選んだ理由について考えをもつようになる。それぞれの考えを聞いた生徒は，有楽製菓が進出した理由を確かめたいと思いを高める。そこで，生徒の考えた理由がどこまで正しいのかを確認するために，有楽製菓で海外事業を担当している高橋さんを招き，生徒の意見をもとに，有楽製菓がインドネシアに進出した理由について話をしていただく。高橋さんの話を聞いた生徒は，有楽製菓がインドネシアの特色を活かし，有楽製菓にとってもプラスになっているということに気づき，日本側の利点について理解を深めていく。一方で，調べ学習の中で，パーム油の生産によって，インドネシアの熱帯雨林が年々減少している資料を見つけた生徒を取り上げ，発言を促す。資料を見た生徒は，日本の進出がインドネシアとの関係を続けることができるのか疑問をもつようになる。そこで，**解き明かす段階**では，年々東南アジアに進出する日本企業が増えている点から，日本の進出がインドネシアにとってプラスになっているのか追究していく。インドネシアへの影響について根拠をもって考えることができるように，インドネシアにかかわる人や団体などについて調べる場を設定する。追究を進めていく中で生徒はいろいろな立場や視点でインドネシアについて考え，プラスになっているかなっていないか自分の調べたことをもとにかかわり合っていく。そこで，インドネシアと日本の相互の関係性がわかるように，高橋さんを再度招き，生徒のかかわり合いをもとに実際に東南アジアで働いた経験をもつ立場で話をしていただく。高橋さんの話を聞いた生徒は，日本企業の進出が東南アジアの発展にもつながっていることに気づき，発展のためにはお互いが欠かせない存在であり，それぞれの良さを生かした大切なパートナーであるということに考えを深めていく。**動きだす段階**では，日本とアジア州全体の関係について，これまで学んだことを生かして各地域に分かれて追究をしていく。今後もお互いに支え合う関係を維持していくために，どんなことに取り組み活動しているのかを追究することで，自分たちの生活とアジア州のつながりに気づき，他地域との関係へと目を向けていく姿を目ざしていく。

2 単元構想図

単元前の生徒の姿
世界の地域について，国の位置や人口などは理解しているが，各地域の特色や人々の暮らしについては実感をもって語ったり考えたりできる生徒は少なく，自分たちとのつながりの意識も低い。

身につけさせたい３つの力
- 日本と東南アジアの企業の関係について疑問をもち，地域を代表する企業がインドネシアに進出する理由を考えることができる（問いを生む力）
- 資料やゲストティーチャーの話から，東南アジアの地域的特徴を説明したり，日本との関係を考えたりすることができる（考えを深める力）
- 身近にあるアジアとのつながりを意識し，これからの日本とアジアのよりよい関係について考えようとする（学びを行動に移す力）

過程	生徒の思い・考え	力を高めるためのてだて
見いだす段階	いつものブラックサンダーと違うな　どういうことだろう ① A ・よく見ると，シンガポールやマレーシアって書いてあるよ ・「ユーラク」じゃなくて「Delfi」になっているよ ・made じゃなくて Popular in JAPAN だから日本で作っていないのかな ・イスラム教に関係するハラルマークがついているよ ・このブラックサンダーは，インドネシアで作っているんだって 有楽製菓はなぜインドネシアを選んだのだろう ②③④ BC 〔気候・産業〕 ・カカオ豆の生産が世界第２位だから，現地で商品を安くたくさん作れる ・パーム油の生産量が世界第１位で，商品の原料を多く手に入れることができる 〔人口〕 ・人口が約２億7,000万人。日本の２倍以上。たくさんの人を雇える ・世界第４位の人口。たくさん商品を買ってもらえる ・平均年齢が約29歳と若く，働き手が多い 〔経済〕 ・インドネシアは日本の貴重な貿易相手 ・インドネシアの物価が安いから，製造や賃金も安くできる ・日本企業が約1,800社進出している ・インドネシアに進出した理由を有楽製菓の高橋さんに聞いてみたい ・インドネシアの特色を生かし効率よく作って売っているね。インドネシアと日本はよい関係を築いているようだ。 ・でも，パーム油を生産するために，どんどん熱帯雨林が減少しているよ	A：(浸り場：問いを生む力) 東南アジアと身近なものとのつながりについて関心を高めるために，東南アジアで売っているブラックサンダーのパッケージを観察する場を設定する B：(浸り場：問いを生む力) 生徒が実感をもってインドネシアに進出した理由を考えられるように，インドネシアについての図書資料を準備したり，タブレットを使って個人追究をしたりする場を設定する C：(着火：問いを生む力) インドネシアにとって日本企業の進出による課題にも目が向くように，パーム油の生産によって減少した熱帯雨林の資料を見つけた生徒を指名し，発言を促す
解き明かす段階	【問題】これからもインドネシアとのよい関係は続けていけるのかな ⑤⑥⑦⑧DE 【続けていける】 ・日本企業で働くインドネシアの人によると，日本企業は給料が高いから現地の人にとっては助かっている ・日東電工では，断食中の食事支援をする事業を行っていると言っていた ・現地の会社も日本の会社と協力することで業績を伸ばしているインターネットの記事を見つけたよ 【続けたいけど厳しい】 ・インドネシアで働く人の話だと,毎年給料がどんどん下がっている。このままでは不安だと言ってたよ ・環境省のデータによると，日本の企業の工場の排水によって川が汚れている。そのせいで現地の人々の生活にも影響が出ている ・インドネシアで勤務経験のある高橋さんに私たちの考えを確認してみよう ・高橋さんは，インドネシアの人と良好な関係を築くために，コミュニケーションをとったり環境を整えたりしていることがわかったよ	D：(浸り場：考えを深める力) 生徒がインドネシアへの影響について根拠をもって考えることができるように，インドネシアに関わる人や団体などについて調べる場を設定する E：(着火：考えを深める力) インドネシアと日本の相互の関係性がわかるように，高橋さんを再度招き，生徒のかかわり合いをもとに実際に東南アジアで働いた経験をもつ立場で話をしていただく。
動きだす段階	良好な関係を築くためには相手の立場を考えることが大切だね 日本と他のアジアの地域はどのようにつながっていくといいのかな ⑨⑩ F 〔東アジア〕 ・韓国は流行の音楽や文化の影響を受けているから仲良くしたいな ・中国は輸入先第１位で，約20%を占めているから頼りにしているんだね 〔南アジア〕 ・インドのIT技術が進化して日本の企業はこれから協力していくことが増えていきそう ・サッカーボールの多くはパキスタンで生産している。学校のもそうかな 〔中央・西アジア〕 ・サウジアラビアから石油の約90%を輸入しているから関係が切れたら困るぞ ・これからはカザフスタンの地下資源に注目が集まりそう	F：(浸り場：学びを行動に移す力) 生徒が学んだことから，日本とアジアとの関係について見つめ直すことができるように，さまざまな企業や地域の活動について調べる場を設定する

未来を創造しようと動きだす生徒の姿
二川にある身近な企業や商品が，東南アジアと結びついていることから，自分の生活とアジア州が大きく関わっていることに気づく。そこから，他地域とのつながりにも目を向けることができる。

3　見いだす段階のてだて（浸り場・着火）と生徒ａの問題意識の高まりについて

単元前の生徒ａの姿
- **世界の地域について，国の位置や人口などは理解しているが，各地域の特色や人々の暮らしについて実感をもって語る姿は少ない**
- **世界の地域と日本や自分たちの生活がつながっているという感覚はあまりない**

単元の導入では，インドネシアで販売されているブラックサンダーのパッケージを生徒に提示し，どこで売っているものなのかを考えさせた（てだてＡ：浸り場）。生徒たちは，裏面にある国の名前や表面にあるハラルマークなどをヒントに，イスラム教徒圏やアジア州にある国ではないかと予想を立てた。調べる活動を通して，生徒ａは，インドネシアのチョコレート会社が日本の有楽製菓と合同で会社を設立してブラックサンダーを販売していることに気づいた。そこで，学級全体にインドネシアがどんな場所なのかを問うと，生徒たちから「東南アジア州にある」「赤道に近く，熱帯気候である」という言葉が出てきた。そこから，生徒のなかで「なぜ熱いところでブラックサンダーを作っているのだろう」という疑問が生まれた。

生徒たちは有楽製菓がインドネシアを選んだ理由に着目し始めたので，インドネシアについて図書資料を準備したり，タブレットを使って個人追究をしたりする場を設定した（てだてＢ：浸り場）。生徒は，産業，人口，宗教などさまざまな視点で有楽製菓がインドネシアを選んだ理由について考えをもつことができた。更に，生徒の中から，「インドネシアを選んだ実際の理由を聞いてみたい」という意見が出てきたので，有楽製菓で海外事業に携わる高橋さんの話を聞く機会を設定した【資料１】。生徒は高橋さんの話を聞くことで，有楽製菓がインドネシアの人口や産業，宗教などの特色に着目して進出したことを知り，日本の企業とインドネシアが良好な関係を築こうとしていることに気づいた。

【資料１】インドネシアを選んだ理由について話をする有楽製菓の高橋さん

そこで，教師は日本の進出による課題にも目が向くように，個人追究の中でパーム油の生産によって減少した熱帯雨林の資料を見つけた生徒を指名し，全体の場で共有した（てだてＣ：着火）ところ，資料を見た生徒ａから，「この数十年で急激に森が減少したのはなぜだろう。」という発言が出てきた。日本とインドネシアが良好な関係だと感じていた他の生徒たちも，資料を見たことで，本当にインドネシアにとって日本との関係を続けていくことがよいことなのだろうかという疑問をもち始めた。そこで，これからもインドネシアとのよい関係は続けていけるのだろうかという問題を設定した。

4　解き明かす段階の２つのてだて（浸り場・着火）の検証

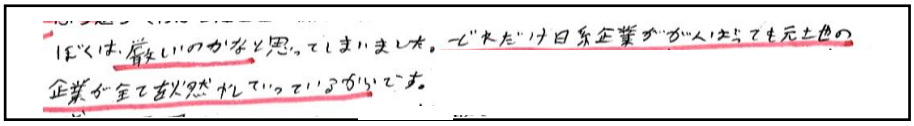
（１）　浸り場のてだてについて

見いだす段階での生徒ａの姿
- **「有楽製菓がインドネシアを選んだのは，文化，人口，産業など多くの面で好都合だったから」と理由を考えた**
- **熱帯雨林が減少している資料を見て，その理由から日本の進出による負の影響にも目を向け日本がこれからもインドネシアとよい関係を続けていけるのだろうかと疑問をもち始めた**

てだてＤ（浸り場:考えを深める力）

・日本企業の進出がインドネシアに与えた影響について根拠をもって考えることができるように，インドネシアに関わる人や団体などについて調べる場を設定する

第４時での『これからもインドネシアとのよい関係は続けていけるのだろうか』という問いに対し，生徒がインドネシアへの影響について根拠をもって考えることができるように，インドネシアに関わる人や団体について調べる場を設定した（てだてＤ：浸り場）。生徒ａは，インドネシアの森林減少の原因に着目して個人追究を進めていった。調べていく中で生徒ａは，インターネットで多くの日本企業や団体が植林や持続可能なパーム油の活用などさまざまな森林保全活動を行っていることを見つけた。生徒ａの振り返りには，「インドネシアの環境保全のために，たくさんの日系企業が動いていることを知りました。」と書いてあり，今後も日本とインドネシアは〔良好な関係を続けていける〕という考えをもち始めていた。しかし，個人追究をすすめていくにつれて，生徒ａは日本企業が支援活動を行っている一方で，インドネシアの地元企業が熱帯雨林を全て燃やしているという事実を見つけた。パーム油のプランテーションを造るために失われた森林面積が１年あたり約 48 万 ha であるという具体的な数字を目の当たりにしたときの生徒ａの振り返りには，「どれだけ日系企業ががんばっても，地元の企業が全てを燃やしている。」【資料２】と書いてあり，良好な関係を続けたいけど厳しいという考えに変わっていった。



【資料２】生徒ａの振り返り（第６時後）

（２）　着火のてだてについて

教材に浸った生徒ａの姿

・個人追究から，「日本企業がどれだけ支援をがんばっても，インドネシアの地元企業が森林を燃やしてしまうので，このまま関係を続けていくのは厳しい」という意見をもった

てだてＥ（着火:考えを深める力）

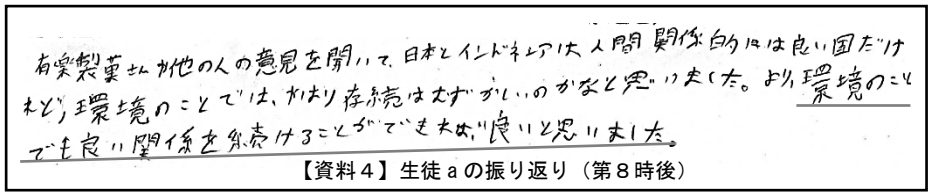
・インドネシアと日本の相互の関係性がわかるように，高橋さんを再度招き，生徒のかかわり合いをもとに実際に東南アジアで働いた経験をもつ立場で話をしていただく

第８時では，それぞれが行った個人追究をもとに日本とインドネシアは良好な関係を続けていける，続けていくのは厳しいというそれぞれの立場で話し合いを行った【資料３】。生徒ａも含め，関係を続けていくのは厳しいという意見が続いていく中で，生徒ｅの「このまま関係をやめるのはもったいない」という意見を取り上げると，生徒たちはこれからインドネシアと良好な関係を築く方法はないかと考え始めた。そこで，有楽製菓の高橋さんを再び招き，実際に東南アジアで働いた経験から両国の関係性について話を聞く場を設定した（てだてＥ：着火）。

生徒ｂ：インドネシアの団体の 92%が日本の ODA が役に立ったと言っていることから，日本を信頼していることがわかる。
生徒ｃ：持続可能なパーム油を使おうと活動している RSPO という団体の認証があって，100 社以上の日本企業が関わっている。
教　師：続けていけるという意見に対して，言いたいことがある人はいるかな？
生徒ａ：日本企業がどれだけがんばって支援しても，インドネシアの地元企業が燃やしている。１年で約 48 万 ha も伐採していて，自然林がどんどん減っている。このままだと厳しいと思う。
生徒ｄ：パーム油の生産を増やすと，熱帯雨林や生物多様性に多くの影響を与えてしまう。でも，パーム油を作らないと多くの国に供給できなくなって困る国が出てきてしまう。だから，インドネシアの負担を減らす対策をしていかないと，厳しいと思う。
教　師：このまま何もしないと厳しいままだということだね。
生徒ｅ：インドネシアは平均年齢が若くて，これから成長していく経済大国でもある。日本は今，インドネシアに多くの支援をしているし，インドネシアは親日家でもある。このまま関係をやめるのはもったいないと思う。

【資料３】問題「これからもインドネシアとのよい関係は続けていけるのかな」についての話し合い（第８時）

高橋さんから，児童労働をなくすための取り組み，インドネシアの人々に日本の技術を伝えて広めていくための活動，現地の人々と現地の言葉で挨拶を交わしたりコミュニケーションをとったりすることの効果について話をしていただいた。高橋さんがインドネシアでの勤務で大切にしていた活動や思いを聞くことで，生徒は個人追究や話し合いだけではわからなかった，お互いのよい点を生かしたり，コミュニケーションを図ったりするための工夫など新しい視点に気づくことができた。生徒ａの振り返りには，「日本とインドネシアは人間関係的には良い国だけれど，環境のことでは，やはり存続はむずかしいのかなと思いました。より環境のことでも良い関係を続けることができれば良いと思いました。」と書かれていた【資料４】。高橋さんの話を聞いたことで，課題点だけでなく，良好な関係を築くために互いに工夫していることに気づき，考えを深めていったことがわかった。このことから，てだてＥは有効であったと考える。


有楽製菓さん他の人の意見を聞いて，日本とインドネシアは人間関係的には良い国だけれど，環境のことでは，やはり存続はむずかしいのかなと思いました。より環境のことでも良い関係を続けることができれば良いと思いました。

【資料４】生徒ａの振り返り（第８時後）

５　動きだす段階のてだて（浸り場）と未来を創造しようと動きだす生徒の姿について

アジア州に目を向けて日本と他国との関係にも気づいてほしいと考え，単元の終末に，日本とアジアとの関係について見つめ直すことができるように，さまざまな企業や地域の活動について調べる場を設定した（てだてＦ：浸り場）。生徒ａは，日本とカザフスタンとの関係について個人追究を行った。追究を進めるなかで，日本とカザフスタンは原油の輸入や自動車の輸出など，貿易面で大きく関わっていることに気づいた。さらに追究していく中で，生徒ａは，カザフスタンでの砂漠化や，核実験場による放射能汚染という現状に対して，日本が医療支援や技術協力として多くの支援も行っているということに着目した。生徒ａは振り返りで，「アジア州には発展途上国が多く，日本は先進国として援助や支援を行っている。ぼくたちも募金などでその助けができないだろうか。このまま日本が支援を続けていってほしい。」と自分の思いを書いた。生徒ａはインドネシアの追究から学んだことを生かして，他国と日本との関係に目を向け始めた。また，その中で自分にできることについて具体的な方法を考え始めた。

未来を創造しようと動きだす生徒ａの姿

「アジア州には発展途上国などが多く，日本は先進国として援助を行っている」ことを知り，世界と日本や自分たちの生活とのつながりを意識するようになった。また，「ぼくたちも募金などでその助けができないだろうか」という思いをもつようになった。